

2005年9月4日 聖霊降臨節第17主日礼拝

『三度にわたって』

(エレミヤ書 23 章 5～8 節、使徒言行録 17 章 1～9 節)

パウロとシラスは、フィリピの町を出発しました。そして、エグナティア街道を西に進んでフィリピの町から四十八キロ離れたアンフィポリス、そこから更に南西に四十六キロ離れたアポロニアを通過して行きました。パウロとシラスは、アポロニアから五十キロのテサロニケに到着しました。テサロニケは、紀元前315年にアレクサンダー大王の支配下に置かれ大王の姉妹の名にちなんでテサロニケの名が付けられました。以来テサロニケの町は、マケドニア州の第二区の首都で、紀元前157年からローマの州総督府が置かれていました。ここには、ユダヤ人たちの会堂がありました。パウロたちは、何時もそうしてきたように、ユダヤ人たちの会堂の礼拝の時出かけて行きました。安息日の礼拝の為に、ユダヤ人たちや神をあがめるギリシャ人、婦人たちも集まっていました。

こうしてパウロは、三回の安息日に渡ってユダヤ人の会堂に入り、聖書を引用し、論じ合い、「メシアは必ず苦しみを受け死者の中から復活する事になっていた」と、また「このメシアは、わたしが伝えているイエスである」と説明し論証したのです。メシアは、必ず苦しみを受けて、三日目に復活する事になっているこのことは、イエス御自身が生前から弟子たちに繰り返し教えて来たことです。パウロとシラスもイエスがなさった通り、メシアの苦しみと復活のことをテサロニケの人々に伝えました。今までユダヤ教の会堂の礼拝に与って来た人々にとって、こんなことを聞いたのは始めてでした。神が遣わした方が全ての人々に捨てられ、神からも見捨てられて死んだ。それから三日目に、神の力で死人の中から引き上げられて今も生きておられる。これが、エルサレムで十字架に掛けられた死刑囚のナザレのイエスのことだということです。わたしたちにとっては、イエスさまが十字架に掛けられたのは二千年前の遠い歴史の彼方で起こった事件です。けれどもパウロからこの話を聞いた人々に取っては違います。パウロの第二伝道旅行が西暦50年頃だとすれば、イエスが死刑になってから、まだ二十年余りです。神様が遠い昔から約束なさったメシアが二十年あまり前に地上に来ておられた。そのメシアが、人々から侮辱されて死んだ等と聞かされたのです。人々は、どう受けとめたらよいのか考える時間が必要でした。

安息日ごとに三度に渡って、パウロは繰り返しイエス苦しみと復活のことを語りました。すると、パウロから福音を聞いた人々には様々な反応が起こったのです。「彼らのうちのあつもの」(この会堂に集っていたユダヤ人の幾人か)は、パウロとシラスの二人に従ったのです。また「神をあがめる多くのギリシャ人」や「かなりの数のおもだった婦人たち」もパウロとシラスに従ったのです。

「従う」という言葉は、「くじで割り当てる」とも翻訳出来る言葉です。従って、パウロ、シラスに従った人々は、神によってパウロとシラスの側に割り当てられたということです。つまり、ここテサロニケのある人々が、イエスを神の遣わしたメシアだと信じるようにな

ったのは神の業でありました。パウロの説教を聞いて信じた人は、少なくありませんでした。

福音が語られるとき、全ての人が信じるわけではありません。パウロのような人が、上手にわかりやすく話したら、福音は必ず伝わると思いたいのですが。実際は、全ての人が信じる訳ではありません。主イエス御自身が、福音を語った時でさえも信じない人がいました。同じ福音を聞いても、信じる人と拒絶する人がでるのです。パウロの時も福音を聞いて多くの人が信じたのです。しかし、一方でこれを不愉快に思う人々がいたのです。皆と同じように会堂で礼拝を守り同じ福音を聞いたユダヤ人たちの中に信じない人がいたのです。この人たちには、パウロたちを妬んでいました。パウロに敵対した人々は、本当はパウロに反対したのではなく、実は神の遣わされた主イエスに反対し、主を拒んでいたのです。

主イエスに反対するユダヤ人たちは、広場にたむろしているならず者と呼ばれる人たちを仲間に取り込みました。考えてみるとこれは奇妙なことです。なぜならこのユダヤ人たちは、毎週会堂に来て安息日の礼拝を守って来ました。異教社会の中で、礼拝を守り続けることは大変なことです。異教の社会で礼拝を守ることの大切さを解ってもらえない。そのような信仰の戦いをして、礼拝を守って来たということは大変なことであったと思います。しかし、そこに、何時しか傲慢な心が育っていたのかもしれないのです。主イエスは、このような人々のことをファリサイ派の人と徴税人の二人のたとえ話を通して教えてくださいました。二人は、神殿に祈るためにやってきました。徴税人は、遠くに立って胸を打ちながらこう祈りました。「主よ、罪人の私を赦して下さい」と。他方、自分は正しい者だと誇るファリサイ派の人は立って胸を張って心の中で祈りました。「神様、わたしは他の人たちのように奪い取るもの、不正な者、姦通を犯す者ではなく、またこの徴税人のような者でもないことを感謝します」と祈りました。徴税人は、神に義とされて帰りました。しかし、自分は正しいと誇るファリサイ人は、神の前で義とされて家に帰ることは出来ませんでした(ルカ 18 章 9~14)。パウロの語る福音を拒んだ人たちにも、似たような思いがあったのではないのでしょうか。自分たちは、異教社会の中でがんばって礼拝を守ってがんばって来た。自分たちは、異教徒や罪人とは、違うと。わたしたちも、どうかすると自分の信仰を誇り他の人たちを見下したくなる誘惑があります。自分たちは、そこらにたむろしてる連中とは違う。そんな自負があったユダヤ人たちが、何故、町でたむろするならず者と呼ばれる人々と仲間になったのでしょうか。それは、イエス様を信じる人たちを迫害する為だったからです。そのためなら、手段を選ばなかったのです。

一部のユダヤ人と、町にたむろしている人の一団は、暴動を起こし町を騒がせたうえで、一人のクリスチャン、ヤソンの家を襲いました。ヤソンというクリスチャンは、聖書ではここに登場するだけです。ヤソンの名は、旧約聖書に出てくるヨシュアをギリシャ語の音に表記した名前です。聖書の名を付けるくらいですからヤソンも、ユダヤ人だったのでは

ないかと言われています。イエスさまの名前も、ヨシュアから、ギリシャ語の音に移し変えた名前です。これは偶然の一致かもしれませんが、ヤソンの家に押し掛けた人たちが、実は主イエス御自身を攻撃していた。そのことが、このことから良く解ります。

妬みに駆られたユダヤ人とその仲間たちは、一緒になってヤソンと数人の兄弟クリスチャンたちを捕まえて「町の当局者たちのところ」へ連行しました。「町の当局者たち」は、市民の中からローマ帝国によって選ばれた数人の役人たちです。ユダヤ人たちは、ヤソンと兄弟たちを訴えていました。「世界中を騒がせて来た連中が、ここにも来ています。」連中とは、パウロやシラスのことです。ヤソンはそんな連中をかくまっているのです。「彼らは、皇帝の勅令に背いて『イエスとという別の王がいる』と言っています」と告発したのです。この告発は、町の当局の人たちを動揺させました。またやっかいなことが起こるのではないかと。パウロ達は、騒ぎを起こしたことは決して騒ぎを起こしたことはありません。フィリピの町でも、牢屋で地震が起こっても決して脱獄もしないでおとなしくしていました。まして、ヤソンと兄弟たちには、パウロを担いで人々を扇動するつもりなど全くありません。奇しくも、ヤソンはイエスを同じ訴えを受けたのです。主イエスもまた、王を標榜した訴えられ、人々を扇動するテロリストであるかのような扱いを受けました。主イエスを信じる人は、主イエスと同じような目に遭うのです。この時は、ヤソンと兄弟たちは保証金を取られて釈放されました。

主イエスの裁判の時は、どうだったでしょう。主イエスが逮捕され裁判に掛けられた時も、偽りを証言する人々が次々と現れたのです。でもその証言は食い違いだらけでした。本当は、だれにもイエスが何も罪など犯していないと皆解っていたのです。だけど、人々はイエスを有罪だといって聞かなかったのです。裁判長のピラトにもイエスが無罪だと解っていました。人々が、どうしても納得しないので、ピラトは鞭で打った上で釈放しようとの妥協案を出したのですが人々はイエスを死刑にしろと聞いて聞かなかったのです。このようにして何の罪もないメシアを世の人々は、死刑にしたのです。しかし、これが、神の必然であったのです。わたしたちは皆イエスを死刑にしたこの世に属する者です。わたしたちは皆神に反逆するものでした。決して、自分たちの罪を認めず神様の方が間違っているといってしまう。それがわたしたちです。

そのような罪深いわたしたちの為に、神は独り子である神イエスをわたしたちの世に遣わされたのです。神は、罪のないイエスにわたしたちの罪を背負わせたのです。主イエスを信じた人が罪を赦される為だったのです。このイエスは神によって復活され今は神の右におられます。それが、二千年あまり教会が語り続けてきた福音です。福音を聞いて神の側に立ち返る人もあり、他方、信じないで人が出てきます。自分は罪人などではないと頑張ってしまうのです。わたしたち罪人は頑固です。福音を聞いてイエスを信じる事が出来たのは神の恵によるのです。神の恵によってわたしたちは信仰を与えられて、恵によって信仰を全うさせて頂くのです。信仰は、恵によって始まり恵によって完成されるのです。これからも、わたしたちは恵から恵へと進んで行きましょう。 [説教者：堀地敦子牧師]